

100周年通信 第18号

R5 1.27

前号に引き続き「生徒代表誓いの言葉」を紹介します。

生徒代表の赤元さんは、力強く誓いました。

これまでの100年間の歴史と伝統を継承し、新たな歴史を創造するために、大高生としての誇りを持ち、悔いのない学校生活を送っていきます。

矜持(きょうじ)を持って高校生活を送る。頼もしい限りです。

**地域のみなさまに「自分たちの地元には大津高校がある」
と、胸を張っておっしゃっていただけるように責任感
を持って生活していきます。**

この視点には正直驚かされました。「**地域に愛される学校**」本校に勤める私たちにも求められている視点だと改めて思いました。

最後に

先生方に誓います。ここで学んだことを、今後の自分たちの人生に活かせるように努力し続けることを。



大津高校生と共に日々を送っている私たちの背筋が伸びたことは言うまでもありません。
部活動等で個人的に接する機会が多い赤元さん。その堂々たる宣誓を聞いているうちに熱いものがこみ上げてきました。

式典はいよいよフィナーレを迎えます。

式典に欠かせないのは音楽です。フィナーレを飾るのも音楽だと思えます。

全校生徒が声高らかに校歌・生徒歌を斉唱して式典を締めくくる。これに勝るものではありません。

しかし、ここ3年間は全校生徒が校歌や生徒歌を斉唱する姿は一切ありません。「100周年記念式典」と言えども、例外ではありません。

以前この100周年通信でお伝えしたとおり

**ここ2年の卒業式では、
国歌は芸術科(音楽)の先生による独唱でした。
「蛍の光」は在校生が独唱もしくは斉唱し、
「仰げば尊し」は卒業生が独唱もしくは斉唱し、
校歌と生徒歌は元生徒会役員の卒業生たちが代表して斉唱しました。**

そこで、100周年記念式典でも全校生徒による斉唱は無理だとしても、生徒の代表による斉唱は実現したいと思いました。

芸術科(音楽)の赤星先生に歌のご指導をお願いしました。

ある日の放課後の練習風景です。



赤星先生のご指導の下、生徒たちの伸びやかな歌声が音楽室中に響きわたっていました。
「これはいけるぞ」と、ほくそ笑みしました。

全生徒を代表して校歌・生徒歌を披露してくれる1, 2年の生徒会のみなさんは練習での確かな手応えを感じて、式典前日のリハーサルに臨んだことだと思います。

ただ、そもそも体育館と音楽室は作りが違います。規模も違います。あれだけ気持ちよく響き渡っていた歌声が、ただっ広い空間と全校生徒の身体に吸い込まれてしまったかのように体育館の後方まで届きませんでした。無理ありません。式典の前日に初めて体育館のステージで歌ったのですから。

歌っている生徒たちは「いつものように歌っているのに、なぜ声が小さいと言われるのだろう」と戸惑いを隠せないようでした。

ここからもう一つのドラマが始まりました。